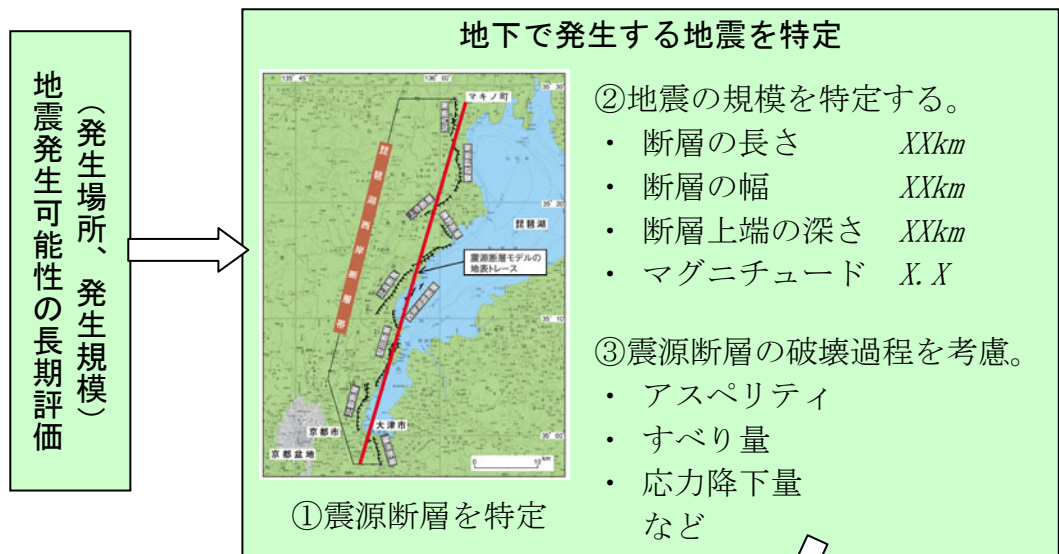


## 2. 震源断層を特定した地震動予測地図

「震源断層を特定した地震動予測地図」とは、特定の想定地震が発生した場合の地震動強さの分布です。

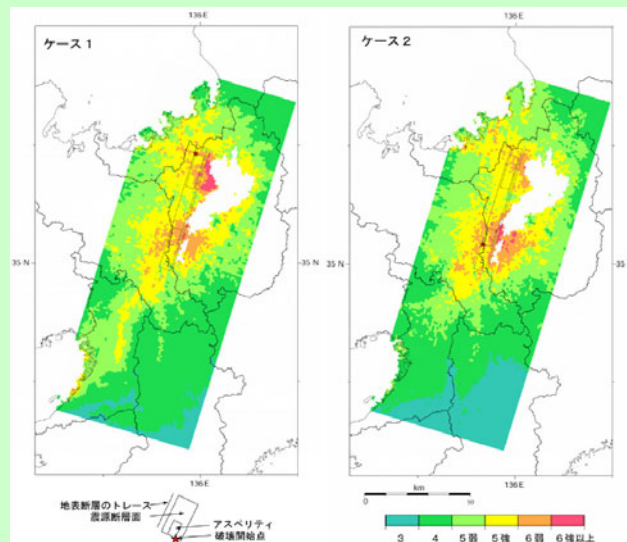
### 2. 1 概要

長期評価の結果をもとに、特定の地震が発生した場合の揺れの強さを予測するもので、以下の手順で計算します。詳細な計算手法については、付属のCD-ROMを参照。



### 地震波の伝わり方に基づき、地表の揺れを計算

- ④深部の三次元的な地下構造を考慮します。
- ⑤「ハイブリッド合成法」により「工学的基盤」の地震波形を計算します。
- ⑥浅部地盤による揺れの増幅を考慮して、「震度」を計算します。



## 2. 2 レシピ（概要）

「レシピ」とは、危険な(地震発生の可能性が高い)活断層や海溝域が存在するとき、そこで引き起こされる可能性の高い将来の地震による強震動予測を、誰がやっても同じ答えが得られる標準的な方法論としてまとめたものです。ここでいう強震動とは、単に最大加速度、最大速度、震度、という単純化された指標だけではなく、一般的な構造物に対する破壊力を知ることのできる大振幅の計算波形を意味しています。

強震動予測の「レシピ」は、

- ① 想定する地震の震源の特性化、
- ② 震源と対象地域を包含する地下構造・地盤構造のモデル化、
- ③ 地震動のシミュレーション手法、
- ④ 予測結果の検証

から構成されます。この「レシピ」を適用することにより、地震災害軽減対策の要である、構造物の被害に関係する周期0.1秒から10秒の広い周期帯域における強震動の高精度予測が可能となります。

このレシピは随時見直しを行っており、最近では平成17年（2005年）3月20日に発生した福岡県西方沖の地震において、多数の観測記録が得られたことから、レシピそのものの検証を行い、改良しました。このレシピの最新版の詳細については、付録3または付属CD-ROMを参照下さい。また、「2005年福岡県西方沖の地震の観測記録に基づく強震動評価手法の検証について」は付属CD-ROMを参照下さい。

## 2. 3 これまでに実施した強震動評価

平成20年4月現在、12の主要活断層帯と3つの海溝型地震の強震動評価を行いました。震源断層が破壊される過程を特定できない場合は複数のケースを想定し、地表の揺れを計算しています（図2.3-1～図2.3-4参照）。

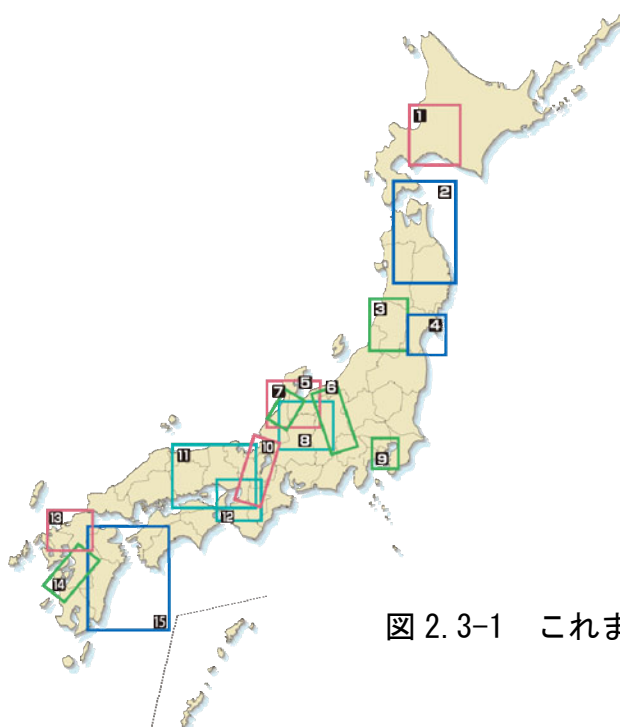


図 2.3-1 これまでに評価を行った地域

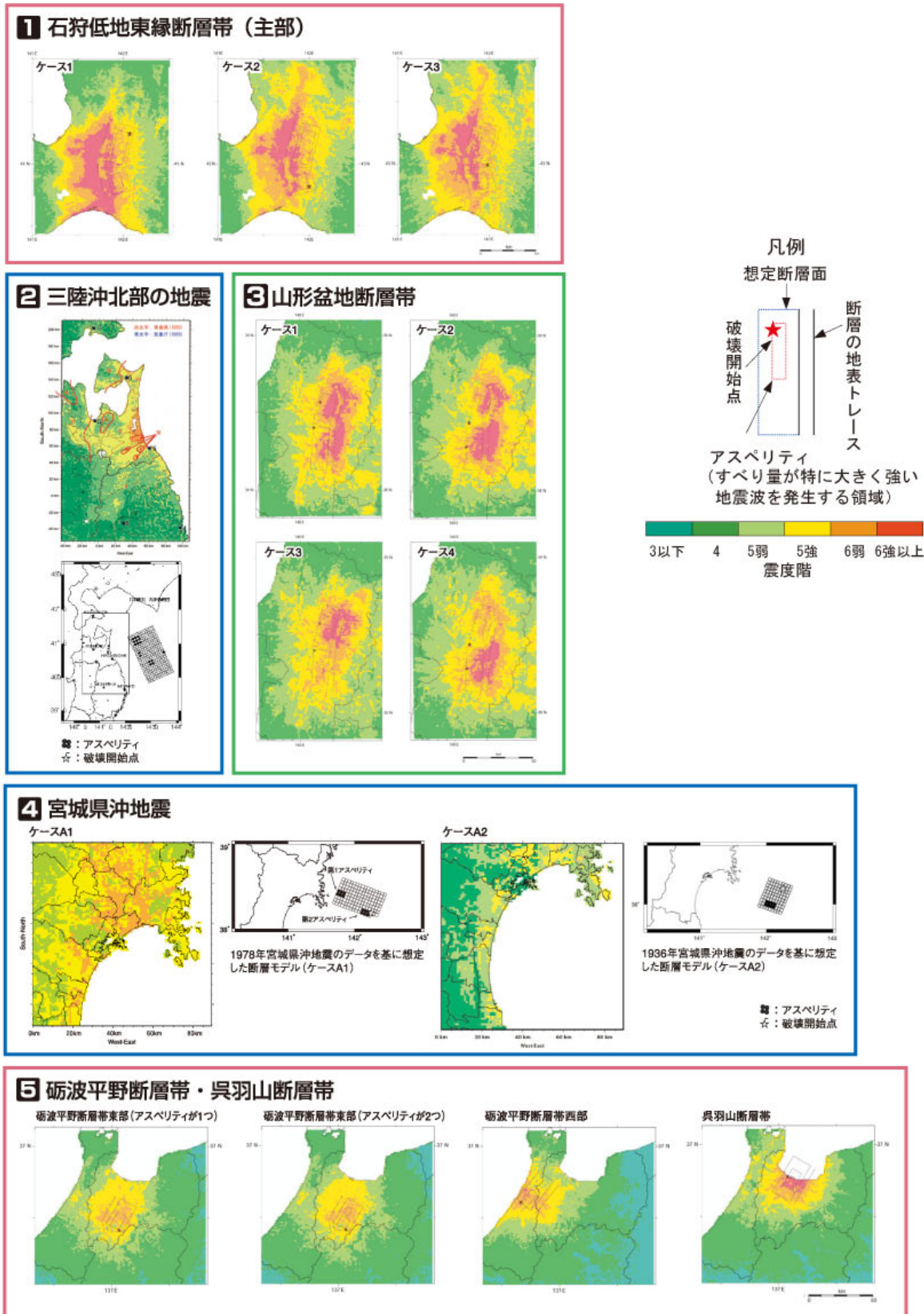


図 2.3-2 これまでに評価した各強震動予測結果 (その1)

各強震動予測結果の詳細は付属の CD-ROM 中の「全国を概観した地震動予測地図 報告書 (主文)」2006 年版の 4 章を参照してください。



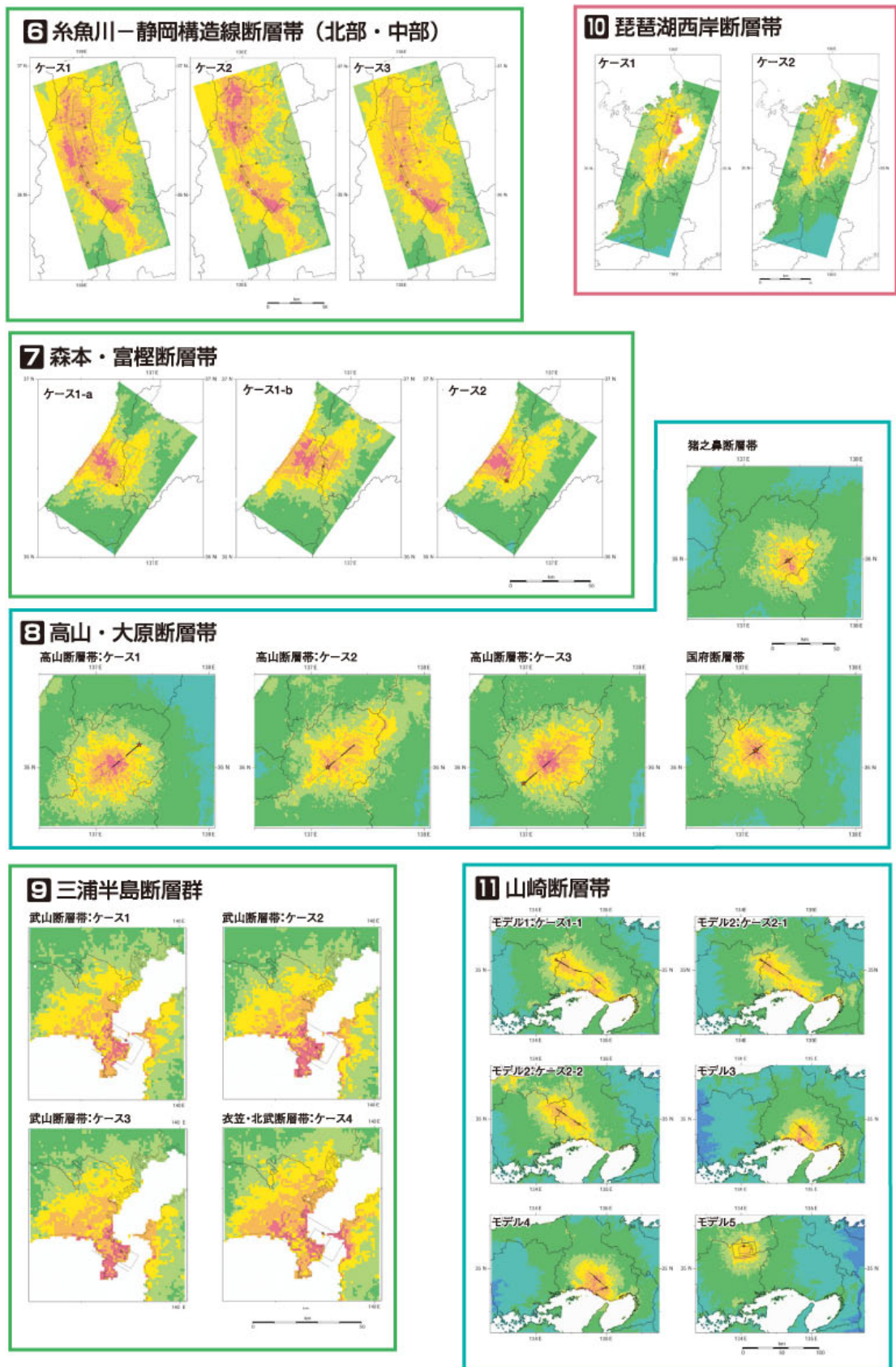


図 2.3-3 これまでに評価した各強震動予測結果 (その2)

各強震動予測結果の詳細は付属の CD-ROM 中の「全国を概観した地震動予測地図報告書 (主文)」2006 年版の 4 章を参照してください。

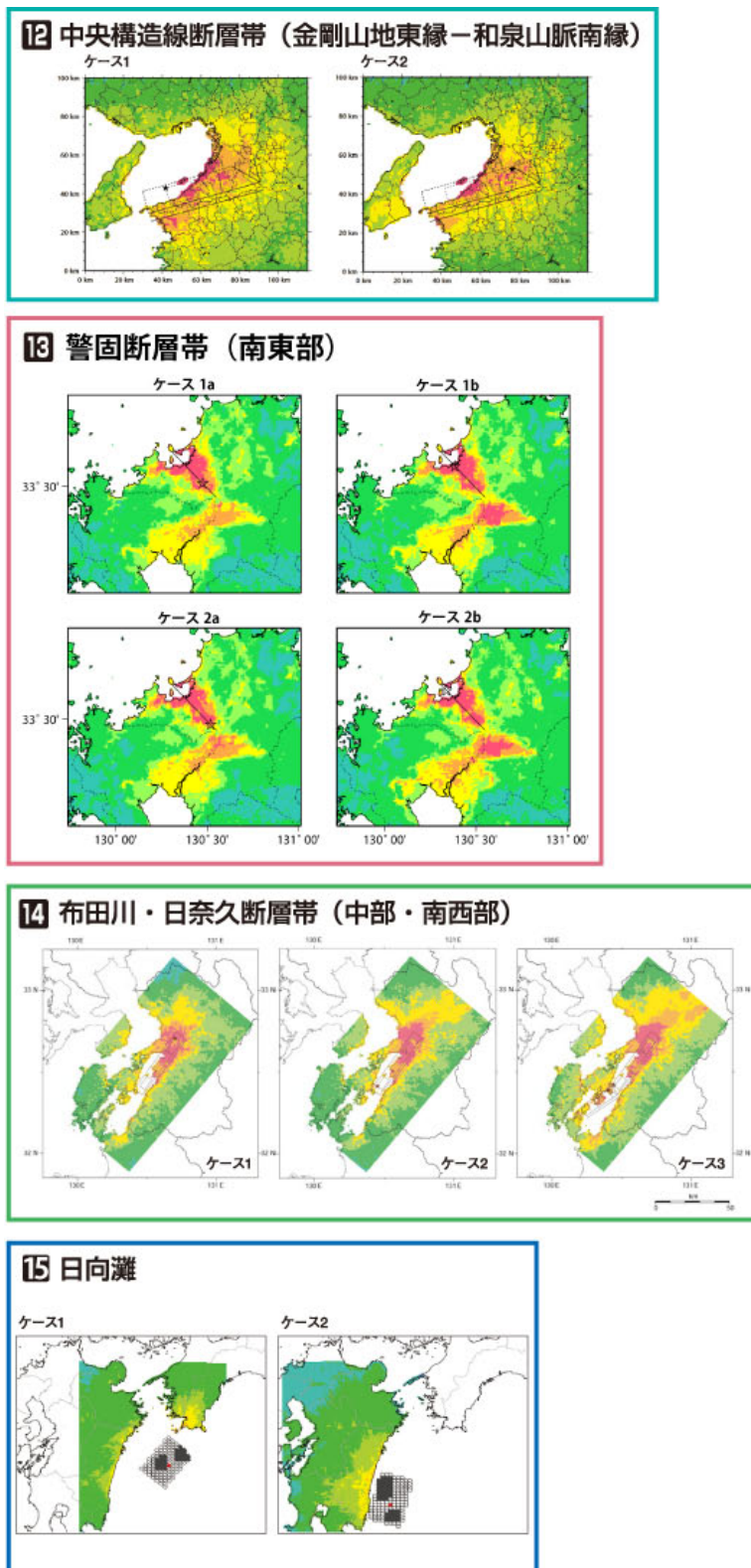


図 2.3-4 これまでに評価した各強震動予測結果（その 3）

警固断層帯を除く各強震動予測結果の詳細は付属の CD-ROM 中の「全国を概観した地震動予測地図報告書（主文）」2006 年版の 4 章を参照してください。警固断層帯の強震動評価についての詳細は付属 CD-ROM 中の 2008 フォルダの KEG0.PDF（「警固断層帯（南東部）の地震を想定した強震動評価について」）を参照してください。